

# 草津温泉の野外巡検案内

関戸明子

群馬大学教育実践研究 別刷

第38号 11～25頁 2021

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター



# 草津温泉の野外巡検案内

関戸 明子

群馬大学共同教育学部社会科教育講座

## Field Excursion Guide to Kusatsu Onsen in Gunma Prefecture

Akiko SEKIDO

Department of Social Studies Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

キーワード：草津町，フィールドワーク，景観，観光

Keywords : Kusatsu Town, Field work, Landscape, Tourism

(2020年10月30日受理)

### 1 はじめに

野外でのフィールドワークは、地理学にとって重要な手法の一つであり、地理教育でも求められている学習であるが、小・中・高校ではあまり実施されていない。このうち、野外巡検では、フィールドで案内者が説明し、参加者に観察を促して学習を行うスタイルをとることが一般的である。通常であれば、案内者が資料を準備せねばならないが、その負担は大きい。そこで、筆者が研究対象地域としてきた草津温泉を事例として、野外巡検に活用できる案内資料と実施記録をまとめることにした<sup>1)</sup>。

地域のあり方を考えるには、自然環境や歴史的背景、土地利用の変化など、人びとの営みと関連づけて学ぶことが必要とされる。本稿をとおして、主題図、鳥瞰図、写真などの多様な資料の読み取りにもとづき、地域の形成過程と特色について学び、それをふまえて実際にフィールドを歩いて回り、観察することの面白さを伝えたい。

本稿の目的は、野外巡検の案内資料を提供することにより、地理的見方・考え方や地理的技能の育成に寄与することにある。野外巡検には、次のような意義が認められる。野外での直接的な観察により探究心や学

習意欲を喚起することができる。体験的な学習により事象を相互に関連づけやすくなって深い理解につながる。現地と地図を対比することで、読図能力を高めることができる。

草津温泉は、年間300万人が訪れる全国屈指の観光地である。本稿では、観光ガイドブックでは紹介されない観察ポイントを取り上げている。フィールドワークの魅力や重要性を実感するためには、まずは自ら経験することが必要である。草津温泉へ観光に行く機会があれば、本稿を使って野外巡検を試みてほしい。

本稿の後半には、野外巡検のときに現地で参照するために作成した14枚の資料を付している。これらの資料はA4サイズで印刷するように作成しているが、本稿では紙幅の関係で縮小して掲載した。PDFファイルを下記に置いているので、活用してほしい<<http://shakai.edu.gunma-u.ac.jp/~sekido/Tourism/KusatsuGuide.pdf>>。

なお、本稿でこれらの資料に言及するときには、右肩に付した資料No.で示す。また、資料にもとづく詳細な考察や参考文献については、関戸(2018a)を参照されたい。

## 2 草津の自然的条件と温泉の利用形態

### 2.1 草津の自然環境

草津町は群馬県の北西部に位置する。1889（明治22）年の町村制施行にともない、草津を含む八つの村が合併して草津村となり、その後1900（明治33）年に草津・前口の二つの大字が分村して草津町が成立した。昭和・平成の大合併でも変化することなく、今日に至っている。

草津の温泉街は、主要な源泉である湯畑を中心に発達し、標高1100～1200mの高原に位置している。夏は冷涼で、8月の日最高気温の平均値は24℃で、30℃を超えることは稀である。一方、1月の日最高気温の平均値は0℃を下回っていて、冬季は厳しい。そこで、人びとは冬季には温泉宿を閉じて里に下りて過ごしていた。この習慣は冬住みとよばれていて、1897（明治30）年まで残っていた。このように、草津は長く季節的な温泉集落であった。

温泉街の西方にそびえる草津白根山は、白根山、本白根山、逢ノ峰など2000mを超える山々からなる日本でも有数の活動的な火山である。

草津白根山の火山活動は、三つの噴火期に区分されている（早川・由井1989）。第一噴火期のものは、その後流出した溶岩や火砕流に覆われており、地表ではあまり確認できない。第二噴火期は、70万年前に始まり、太子火砕流の噴出、青葉溶岩などの流出、小規模な谷沢原火砕流の噴出と続いた（図1）。太子火砕流は広大な火砕流台地を形成した。第三噴火期には、山頂域に三つの火砕丘群が形成され、これらの火口から殺生溶岩などが流下した。

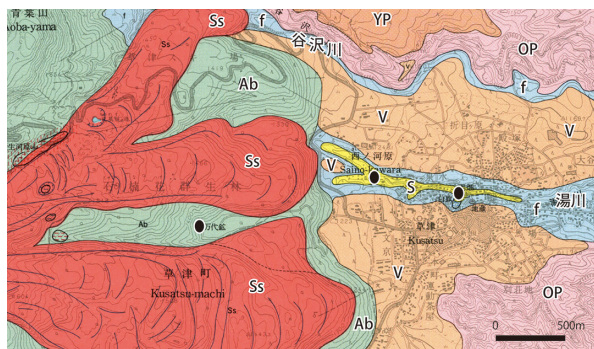


図1 草津温泉周辺の地質図

Ss 殺生溶岩, YP 谷沢原火砕流, V 火山灰層, f 河床堆積物, Ab 青葉溶岩, S 西の河原凝灰角礫岩, OP 太子火砕流, ● おもな源泉  
宇都ほか（1983）の一部に記号を加筆して作成

湯畑を中心に発達した温泉街は、火砕流台地の平坦面に位置する。温泉街の中心部では、火砕流台地が湯川によって侵食されており、西の河原や湯畑では凝灰角礫岩がみられる。

草津白根山の周辺には多くの硫黄鉱山が操業していたが、硫黄が安価に生産されるようになると1970（昭和45）年前後までに閉山した（No.3）。こうしたなかで、新たな鉱床を求めて万代鉱の開発が進められたが、1966年に高温の熱水が大量に噴出したため、工事が中止されて廃坑となった。その後、草津町が掘削・開発を行い、1974年に万代鉱源泉として給湯が始まった。

硫黄鉱山の廃鉱や草津温泉から出る強酸性の水の流入によって、利根川水系の吾妻川は、魚も棲まない「死の川」となっていた。この酸性水は、五寸釘を湯川につけると10日間でほとんど溶けてしまうほど強く、鉄やコンクリートで作られた構造物を急速に劣化させ、飲料水や農業用水としても利用できなかった。

こうした問題を解決するため、1964年、湯川の脇に草津中和工場が建設され、湯川と谷沢川に毎日24時間休むことなくアルカリ性の石灰ミルクを投入する中和事業が開始された（No.3）。

### 2.2 温泉の集中管理

草津温泉は、高温・強酸性の湯で殺菌力があり、古来より名湯として知られ、皮膚病や神経痛などに効能があるといわれてきた。温泉は、草津白根山の地下において、伏流水が熱と特有の成分を得ることによって生成されている（No.3—草津白根山周辺の断面模式図）。

草津町は「泉質主義」を掲げ、「自然湧出泉として湯量日本一」「源泉100%掛け流しの天然温泉」「強力な殺菌力を誇る温泉」の3点を強調している。

1960年代までの草津では、内湯をもつ限られた旅館による排他的独占的な温泉利用がみられ、内湯をもたない旅館の客は共同浴場を利用していた。温泉を引くことは、湯畑からは自然流下が可能範囲でしかできず、温泉街西方にある西の河原からは距離が遠く費用を要するために、零細な旅館が内湯をもつことは困難であった。

1970年代以降、引湯技術の革新と湯畑を上回る湧出量をもつ万代鉱源泉の取得によって、内湯をもつ旅館

が大きく増加した（No.3—草津町温泉給湯事業における給湯件数の推移）。強酸性の温泉に耐性のある塩化ビニル・パイプの使用と耐酸性ポンプの開発という新たな技術により高い土地へ温泉を送ることが可能になった。

万代鉱源泉の利用には、90℃以上の熱湯をどのように冷却するかが課題となった。そこで、プレート式熱交換機を使用する方式をとり、温泉を水道水で約54℃に下げて浴用に配給する一方で、約60℃に温められた水道水も温水として給湯している。

また、温泉熱を利用して、急勾配の箇所を中心に道路融雪（ロードヒーティング）を行っている。草津は寒冷地ゆえに、散水すると凍結して危険なため、道路の下にパイプを埋めて、温水・温泉・排湯の熱で融雪を行っている。

草津町は、町が所有・管理する温泉の保護、濫用の防止、利用の適正化を図るとともに、その源泉地域の観光資源的性格を保全することを目的として、「草津町温泉使用条例」を制定している。

草津温泉旅館協同組合の資料をもとに作成した源泉別の旅館の分布図によれば（No.3）、市街地では湯畑・白旗・地蔵の源泉の周辺にそれを引湯する宿が偏在していること、西部では西の河原源泉を引く宿が多いこと、高原地域のホテルやペンションは万代鉱源泉を利用していることがわかる。

### 2.3 共同浴場の変遷

温泉の湧出するところに、浴槽を設けて、囲いや屋根を作れば、湯を引く必要もなく、新鮮な湯を浴びることができる。1810（文化7）年の草津温泉絵図には、3本不動滝、12本薬師滝、2本天狗滝の並ぶ、打たせ湯が大きく描かれている（関戸2018b）。このほか、御座の湯、熱の湯、綿の湯、脚気の湯、鷲の湯、地蔵の湯などの浴場があった<sup>2)</sup>。湯治に来た人びとは、日々共同浴場で入浴し、概ね三廻り（3週間）滞在した。草津は梅毒やハンセン病などの効能で知られていた。その後、共同浴場は増加し、1880年代の鳥瞰図や案内書には、16か所前後が記されている（No.4）。

鳥瞰図とは、高い空から広範囲の地表を俯瞰したように描いたもので、草津温泉の図は同じ地域を描いたものとしては出版点数が非常に多い（No.5）。草津の特色である共同浴場は、温泉の成分や効能の案内とと

もに、鳥瞰図に描かれていた。

1887（明治20）年にハンセン病患者専用の療養地区を設ける施策が行われ、患者たちが入浴していた御座の湯が湯之沢に移設され、その跡に新築された浴場を白旗の湯と命名した。こうした変化も鳥瞰図は正確に反映している（No.6）。

1910年代以降になると、湯畑に隣接した共同浴場は、周辺の旅館が内湯をもつようになって徐々に廃止されていった（No.4）。打たせ湯があった場所は、灌の湯という浴場となり、1972年にそれも廃止された。いまは滝のように湯が流れ落ちていて、草津を代表する景観として、観光客の撮影スポットとなっている。

一方、1950年代後半から1970年代前半までは住民や内湯をもたない旅館のために、温泉の集中管理導入後には住民のために、共同浴場が設けられている。共同浴場はすべて無料で、住宅街のなかにも点在している（No.3）。現在、共同浴場のなかで観光客に開放されているのは、白旗の湯・地蔵の湯・千代の湯の3か所である。また「熱乃湯」は入浴用ではなく、湯もみの実演や体験を行う観光施設となっている。さらに、観光客向けの有料の浴場として「大滝乃湯」「御座之湯」「西の河原露天風呂」がある。

草津では、次第に内湯旅館が増えつつも、時間湯の存在によって共同浴場の重要性が高められていたといえる。時間湯は病氣療養を目的とした客に利用されてきた草津独特の入浴法である（関戸2020）。①みなで揃って板で湯をもみ、成分を均一にして温度を下げる、②100～200回、ヒシャクで頭部に湯をかける、③湯長の指示で高温の湯に3分間浸かる、これを1日4～5回繰り返すというものであった（No.7）。

## 3 地域社会の形成と変容

### 3.1 明治期から昭和前期までの動向

草津では、1869（明治2）年に、ことごとく焼けて薬師堂のみ残ったといわれる大火があり、旅館の盛衰が激しくなった。その後、病氣療養を目的とした客だけでなく、遊覧客を呼び込むために温泉地の改良が進められた。こうして、旅館・共同浴場の改修や道路の整備、電信（1897年）、電話（1910年）、電気（1919年）の導入などが行われた。

鳥瞰図には、電線が近代化を象徴する図像として描

き込まれている (No.5)。また、乗り物を利用した人びとの姿も見出すことができる。かつては、馬がおもな移動手段であり、明治・大正期の鳥瞰図には人力車も繰り返し描かれている。自動車は1917 (大正6) 年以降、数多くみられる。

1905 (明治38) 年の鳥瞰図には、多くの旅館と共同浴場が網羅的に描かれている (No.8)。旅館の建物は2階もしくは3階建となっており、1911年における旅館一覧と対照すると、湯畑周辺と滝下町に有力旅館が建ち並んでいることがわかる。1908年には立町と仲町で60棟が焼失する火事があり、湯畑東部の旅館が入れ替わった。1910年における旅館と共同浴場の分布図にあるように、湯畑を中心に、泉水通、滝下町、立町、新田町、地蔵町に温泉街が形成された (No.8)。

1926 (大正15) 年9月には草津電気鉄道が草津温泉まで全線開通した。1935 (昭和10) 年には鉄道省の乗合バスが運行を始め、入浴客が増加していった。『群馬県統計書』によって温泉宿数を確認すると、1910年代後半には70軒台で推移していたが、1920年代に漸増し、1930年代になると90軒を上回った。

1940 (昭和15) 年の旅館一覧は81軒を掲載している。最も収容人員が大きいのは225人の一井で、奈良屋、大坂屋、大東館が150人を超えていた。規模には大きな差があり、30人に満たない宿が全体の4割ほどを占めていて、小規模なものには「内湯なし」が多かった (No.9)。

### 3.2 第二次大戦後における地域変容

草津温泉の延べ宿泊客は、1942年には40万人に達していた。戦後その水準に戻ったのは1960年で、その後増加していく。宿泊客数は1971年に150万人を超え、2016年には200万人、2019年には220万人を上回っている。

1956 (昭和31) 年における旅館協同組合の加盟旅館は56軒と昭和初期よりも減っている。旅館の分布形態は戦前とほとんど変わっていない (No.9)。草津における宿泊施設の収容人員は、1960年代後半から上昇を始め、1980年代半ばにピークを迎えた。これは、旧来の温泉街では密集した建物と狭い道路のため旅館の規模拡大が困難であったが、万代鉦の給湯開始にとともに、高原地区にリゾート・ホテルやペンションの立地が進んだことによる。また1980年代後半に始まった

バブル景気は、草津にリゾートマンションの開発ラッシュをもたらした。宿泊施設の部屋数と比べても、リゾートマンションの規模の大きさが理解できる (No.9)。

草津町では、2010年度から国土交通省の「街なみ環境整備事業」を導入し、美しい景観の形成、良好な居住環境の整備を進めている。景観形成重点地区は「湯畑地区」「西の河原地区」「滝下通り地区」「中央通り地区」「地蔵地区」の五つの地区からなり、街づくり協定に沿って建物等の外観の修景などが行われている (No.10)。

湯畑地区では、2013年に日帰り入浴施設の御座之湯、2014年に棚田をイメージしたイベントスペースの湯路広場が設けられ、2015年に熱乃湯が建て替えられた (No.10)。景観形成重点地区は、明治期に温泉街の骨格となっていた場所と重なっており、歴史的な街区を再生し、観光地としての価値を高める試みと位置づけられる。

### 3.3 湯之沢地区の成立と解散

湯之沢の地名は1825 (文政8) 年の「草津温泉之図」以来、湯川が流下していく街外れに記載されていた。1887年に草津温泉改良会が発足し、御座之湯を湯之沢に設けて、ここを患者専用の療養地区とする施策が行われた。

1915 (大正4) 年に草津を視察したイギリス人宣教師コンウォール・リー (1857~1941) は、翌年より草津に移り住み、ハンセン病患者の救済事業を進め、聖バルナバ教会・医院・ホームなどの諸施設を湯之沢地区に開設していった。湯之沢地区は1930年には草津町の総人口の19%を占めるほどで、自治組織をもち、町会議員も輩出していた。

癩予防法が施行された1931年、ハンセン病患者の療養所として国立栗生楽泉園の工事が始まった。栗生楽泉園は湯之沢から2km東方に位置し、翌年より患者の移転が始まった。国および県による隔離政策は難航したものの、1941年には住民574人 (患者428人、健康者146人) すべてを対象として、土地建物の買収、移転手当の支給などに関する協定を締結し、湯之沢地区の解散式が行われ、1942年末に移転が完了した。

国立療養所栗生楽泉園には、2013年に重監房資料館が設置された。重監房とは、ハンセン病患者を対象とした懲罰用の建物のことで、この資料館は、重監房

(特別病室)の負の遺産を後世に伝え、ハンセン病をめぐる偏見・差別と排除の解消をめざす普及啓発の拠点となっている。

## 4 絵はがきと地形図を読む

### 4.1 絵はがきにみる景観の変化

個人的な写真撮影が困難であった時代、絵はがきは観光地の景観を伝える重要なメディアであった。草津温泉を撮影する構図は、湯畑をクローズアップしたものと、高台から湯畑周辺を見下ろした眺めが定番となっていた (No.11)。

No.12は湯畑を主題とした絵はがきである。①の中央にある湯畑には、温泉を流して湯ノ花を沈殿させ、それを採取するための湯樋10数本が架けられている。左手前にある広告塔は、1914年と1916年発行の鳥瞰図に描かれている。湯畑の奥に瀧の湯の屋根 (d)、右手に松の湯 (c)、左手に「きり山」の看板がかかる桐山旅館 (f) がある。湯畑はブロックと木柵で囲われていることがわかる。

②では、湯畑で画面奥が確認できないが、1921年頃に湯畑脇に造成された高山植物園があり、岩石や植物が並んでいる。③になると、高山植物園が撤去されている。左手には「徳川八代将軍御汲上之湯」記念塔があり、「昭和五年六月元幕府家人中村熊太郎書」と刻まれているので1930年建立と推察される。左奥の3階建て入母屋造の山本館本店 (s) は1928年頃までに建築された。中央奥に見える桐山 (f) は、石を置いた板葺き屋根の3階建ての建物であるが、④になると、屋根がトタン葺きの入母屋造になっている。

④では湯畑の囲いが木柵から石柵に取り替えられていることに注目したい。湯畑に残されている石柵の1本に「昭和九年八月草津町 旅館コモロ館 小林盛久」と彫られており、湯畑の囲いは、1934年までに整備されたと考えられる。このほか、熱の湯 (t) と松の湯 (c) が改築されたこと、山本館本店 (s) に塔屋 (展望室) が加わったこと、その左右に3階建ての旅館が新築されたことが読み取れる。

No.13は草津温泉全景を主題とした絵はがきである。①には右奥の高台に1904 (明治37) 年竣工で吾妻郡内屈指の大校舎と評された小学校 (a) がみえるが、1908年4月完成の草津町役場 (h) はないので、この

間の撮影とわかる。また、湯けむりに覆われた湯畑の奥に綿の湯 (b)、左手に松の湯 (c)、手前に瀧の湯 (d) がみえる。松の湯の向こうに3階建ての建物が連なっているが、ここは1908年5月の大火で焼失した。浴場以外の建物のほとんどが板葺き石置き屋根となっていることがわかる。

②には多くの電柱が立っているため、電気の使用が始まった1919年以後の撮影と考えられる。大火の跡地には3階建ての七星館 (g) が建てられているが、まだ復興途上で、綿の湯もなくなっている。手前の瀧の湯 (d) には、湯気抜き用の櫓が加わっている。

③になると、富久住 (n)、萩原 (o) などの旅館が新たに建てられている。富久住が鳥瞰図に描かれ始めるのは1922年のことである。

④では1936年改築の瀧の湯 (d) がみえる。他方で1937年に改築される松の湯 (c) は変化していないので、瀧の湯完成後まもなくの撮影とわかる。正面を平らにした看板建築の名古屋館 (p) が建てられ、桐山 (f) が改装されている。この写真では板葺きの石置き屋根は大東館 (e) ぐらいしか残っていない。

No.14は西の河原を主題とした絵はがきである。①をみると、石像物が複数あって、左手の傾斜地には舞台のような構造物が築かれている。背景に溶け込んでいて識別しづらいが、別の写真を参照すると、舞台の上には石像物が置かれていることがわかる。当時の案内書には成田山の不動尊の分霊が湯滝の上にあることが記されている。その形態から今日も西の河原にある不動明王と同一のものと判断される。

②では舞台がより高く築かれ、そこに小祠を設けていることが確認できる。しかし、③では舞台がなくなっていて、石積みの上から滝が流れ落ちるようになっている。

④は①②③よりも手前から西の河原を撮っており、左手には1935年に建てられたベルツ博士の記念碑がみえる。この写真では、公園として遊歩道や東屋の整備が進んでいることが見て取れる。子どもを連れて散歩する家族の姿がそれを象徴している。

さらに4枚を比べると、背景となっている山の植生の変化に気づく。明治末期から大正初期には禿げ山であったが、次第に樹木が生長したことがわかる。

## 4.2 地形図にみる地域形成の過程

次にNo.2に掲げた5万分の1地形図に、地域形成の過程がどのように現れているのかをみていく。

1912（大正元）年のAでは、湯川の谷に沿って、小さな市街地が形成されている。草津から北西に伸びる道が二重線になっていて、自動車交通以前の長野県方面へ向かう主要道であったことがわかる。

1937（昭和12）年のBでは、草津電気鉄道の路線と「くさつおんせん」の駅名がみえる。市街地もやや拡大している。1930年代の草津には多くのスキー客が訪れており、西方の山麓には、スキー小屋が設けられていた。ただし、地形図にみえる索道は、スキーリフトではなく、硫黄鉱山から鉱石を運搬するためのものである。図の東端に栗生楽泉園がみえる。その手前の鈴蘭地区には栗生楽泉園の職員官舎が置かれた。

1974（昭和49）年のCでは、市街地が大きく拡大している。南東部の高台は1970年代に別荘開発が始まっている。南から草津に至る道路は1964年に全面舗装されて草津有料道路となった。翌年には志賀草津高原ルートが開通し、1970年に全面舗装されて有料となった。これらは、1990年代初めに無料開放された。Cでは有料道路と料金所の地図記号が確認できる。道路の整備が進んだ一方、草軽電気鉄道は1962年に廃止された。戦後、草津の発展に大きな役割を果たしたのはスキー場の開発であった。日本最初のスキーリフトが1948年12月天狗山に建設されたことに始まり、ゲレンデとリフトが整備されていった。

1997（平成9）年のDでは、温泉街北部の外周道路ベルト通りの整備が進んでいる。この道路の外側と西部の高台に多くのリゾートマンションが建てられた。温泉街南東部や南部の別荘地の開発も進展している。さらに、1988年に承認された「ぐんまりフレッシュ高原リゾート構想」にもとづき、北部の音楽の森スキー場と南西部の静可山スキー場の開発が行われた。最盛期の1991年度には、草津国際スキー場90万人、音楽の森スキー場7万人、静可山スキー場10万人、あわせて107万人の入込客を数えたが、その後、スキー客は急減した。音楽の森と静可山スキー場は2000年までに休止・廃止された。2018年1月の本白根山噴火の影響で、白根火山ロープウェイは廃止、草津国際スキー場は縮小して、草津温泉スキー場となっている。

## 5 野外巡検のコース案内

筆者は、これまで学生を対象とする野外巡検をたびたび行ってきた。ここで紹介するコースは、2020年9月26日に、群馬地理学会野外巡検として実施したものである。当日は小雨の降るなか、一般・会員あわせて7名の参加者があった。コースマップをNo.1に示した。5km余の距離があり、11時出発、15時30分解散、所要4時間半の行程となった。

集合は大滝乃湯とし、簡単なコース説明のあと、中和工場にある石灰ミルク投入ポイント（1）に移動した。この日は、国土交通省品木ダム水質管理所・草津中和工場「環境体験ミュージアム」が閉館していたため、外部からの見学となった。湯川沿いにパネルが設置されており、強酸性の河川を中和する事業の概要と意義が解説されている。なお、大滝乃湯や中和工場のある一帯が、かつての湯之沢地区であったことも説明した。

大滝乃湯に戻り、分岐点から東方へ道路を上がって、頌徳公園（2）に向かう急傾斜の遊歩道を登った。この公園には、コンウォール・リー女史の記念碑（1941年の刻印）と胸像（2007年の刻印）が置かれている。

公園を出ると、草津聖バルナバ教会（3）がみえる。教会にはコンウォール・リー女史の働きを紹介するリーかあさま記念館が併設されている。当日は、館内でビデオを視聴し、展示資料の説明を受けた。

教会から坂道を下ると地蔵の湯（4）に至る。地蔵の湯の浴場の建物の脇には、ベンチが置かれており、雨をしのぐこともできるため、そこで軽食をとったあと、巡検資料について詳しい解説を行った。

地蔵の湯の傍には源泉湧出地と地蔵堂がある。また、浴場の前は広場として整備されており、足湯が設けられている。この一帯は再整備事業が行われており、浴場北の高台には、2021年完成予定で漫画図書ギャラリー、カフェ、広場の整備が進められていた。すでに木製の通路は完成しており、そこを歩いて、バスターミナル方面に向かった。途中、湯畑を望める場所には、展望デッキが設置されている。

賑やかな中央通りに出て左に曲がって上がると、瑠璃の湯（5）がある。19世紀半ばには成立していた共同浴場である。さらに進み、バスターミナルを左手に



しつつ、光泉寺（6）の参道に向かった。

草津の開湯をめぐる歴史叙述には光泉寺の縁起を欠かすことはできない。それには次のようにある。

721（養老5）年、行基が東国巡行のみぎり、薬師如来の示現によって温泉に浴し、その効験を試み、世人に浴湯の法を教えた。これより歳月を追って盛んになる。1193（建久4）年、源頼朝が三原での狩りのみぎりに温泉に浴した。その湯を名付けて御座の湯という。いつの頃か、祠を建て祀るようになり、これを頼朝の宮という。

行基と源頼朝による温泉の発見と利用に関する叙述は、19世紀前半の温泉絵図や案内書でも確認できる（関戸2018b）。境内には、湯治中に亡くなった人びとを供養するために1900年に建てられた「入浴逝者之塔」、1917年建立の「行基菩薩当山開創 壹千弍百年紀念之塔」がある。ちょうど2020年は、開山1300年に当たり、それを記念した大きな塔婆が本堂前に立っていた。

光泉寺の石段を下りて行くと、正面に湯畑（7）が望める。右手に湯路広場、左手に御座之湯がある。大正期までの建物の多くは板葺き石置き屋根であった。いまこの景観は残されていないが、御座之湯は杉板を使用したとんとん葺きの屋根となっている。屋根に石はないものの、かつての景観を想起できる。

湯畑は2017年に国の名勝の指定を受けた。將軍御汲上の湯枠、文政年間の湯滝の灯籠、昭和初期の石柵、「徳川八代將軍御汲上之湯」記念塔はいまもみることができる。湯畑周辺では、白旗の湯、白旗源泉地と頼朝宮（写真A）は残っているが、瀧の湯、綿の湯、脚気の湯、松の湯といった共同浴場は取り壊されて現在はない。瀧の湯があった場所は、湯が流れ落ちる滝壺となっており、松の湯の跡には足湯が設置されている。また、湯畑周辺には「雪」とあるマンホールがみられるが、融雪用のものである。西の河原の遊歩道でも「雪」と記されたマンホールを見つけやすい（写真B）。

湯畑に面した旅館では、2012年に国の登録有形文化財となった山本館本店が昭和初期の温泉宿の姿を伝えている。No.12とNo.13の絵はがきと現地の景観を対比して観察した。

山本館本館を眺めながら西の河原通りを行く。途中、分岐点の西北隅に道標（8）がある（写真C）。1798（寛政10）年のもので、向かって右面に「従是常布滝・白根山道」、左面に「従是鬼泉水・氷たに道」とある。北へ向かう道は、常布滝、白根山から渋峠に至る街道となっていた。鬼泉水とは西の河原のことで、氷谷は草津八景に入る名所であった。西の河原通りには、多くの店舗が建ち並んでいるが、通りから奥

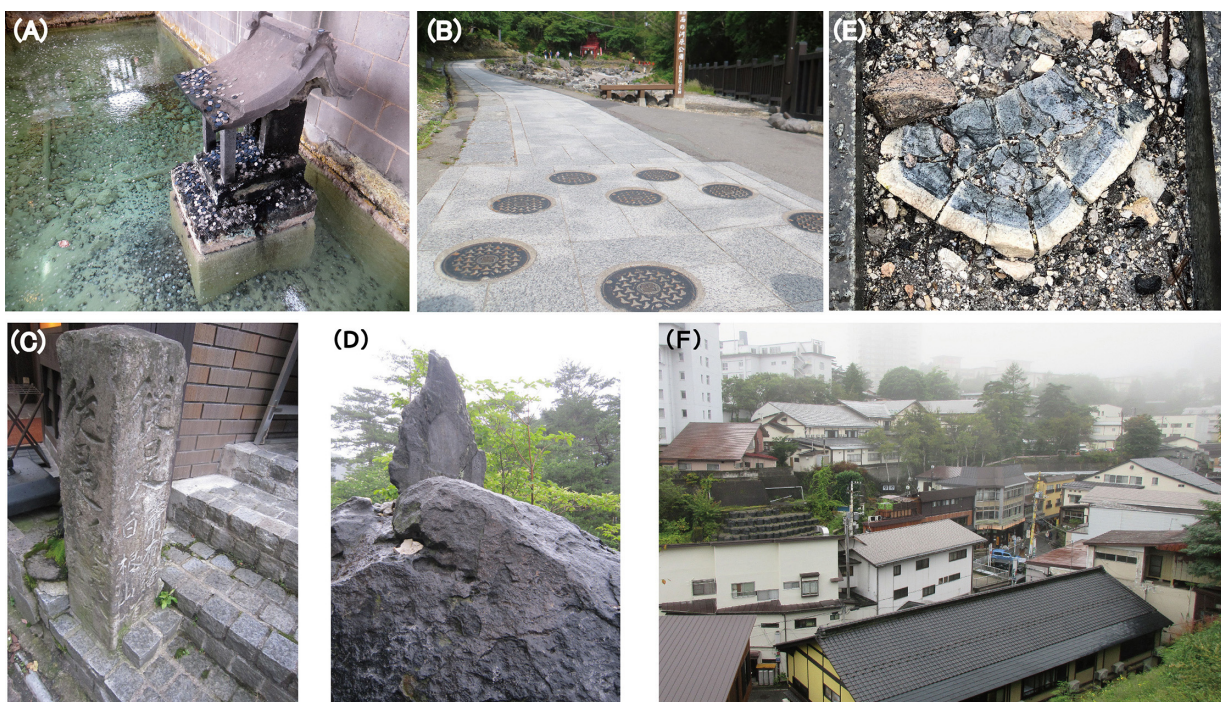


写真 巡検コースにおける観察ポイントの例

に少し入ったところに、凧の湯（9）がある。ここも19世紀半ばに成立した共同浴場である。

西の河原公園（10）は遊歩道が整備されており、格好の散策場所となっている。No.14の絵はがきと現地の景観を対比した。源泉地は高温で危険であるため、立入禁止となっている。ここでは、草津八景に数えられていた鬼の茶釜、1935年建立のベルツ博士の記念碑、不動滝と不動明王などをみることができる。勧請当時の不動明王は、現在の不動滝の右上にある（写真D）。また、西の河原では、凝灰角礫岩に強酸性の温泉が浸透してできたタマネギ状の模様のある岩石をみることができる（写真E）。

来た道を引き返し、西の河原公園を出る前、草津片岡鶴太郎美術館のところで、湯川の暗渠入口を確認しておきたい。ここから湯川は暗渠となり、西の河原通り・湯滝通り・滝下通りの下を流れ、大滝乃湯前で開渠となる。

往路で確認した道標のあった分岐点を北に折れ、急な坂道を登っていく。そこから細い路地を抜けて白根神社に向かう。途中、見晴らしのよいところがあり、西の河原通りの街並みを見下ろすことができる（写真F）。ここからは対岸の旅館群もよく見え、湯川が形成した谷の深さと、こうした谷間に古くから温泉街が立地していたことを実感できる。

日本武尊を祭神とする白根神社（11）は、1873（明治6年）に郷社に選定されて、現在地に整備された。境内には、1904年に湯治客が建立した「草津鷲湯碑」がある。

参拝後、参道の石段を下って湯畑に戻った。そこから滝下通りに入ると、共同浴場の一つ、千代の湯（12）がある。滝下通りには、2階3階に縁側を付けたようにする「せがいでし梁づくり」を再現した旅館が並んでいる。通りを東に進むと、Y字路の分岐点に「鷲乃湯跡」の碑（13）があり、「草津節発祥の地」の

案内板も置かれている。No.11に示した昭和初期の鳥瞰図を参照すると、いまも同じ旅館名を見出すことができる。

さらに行くと煮川の湯（14）に至る。ここの源泉は大滝乃湯で用いられている。大滝乃湯の脇で、湯川が開渠になる場所を確認したのち、集合場所に帰って野外巡検を終了した。

草津の温泉街は、窪地の底にある湯畑を中心に発達したため、坂が多く、道も狭くてわかりにくい。しかし、こうした特徴は、街なみの景観に変化をもたらしており、独特の魅力につながっている。

## 注

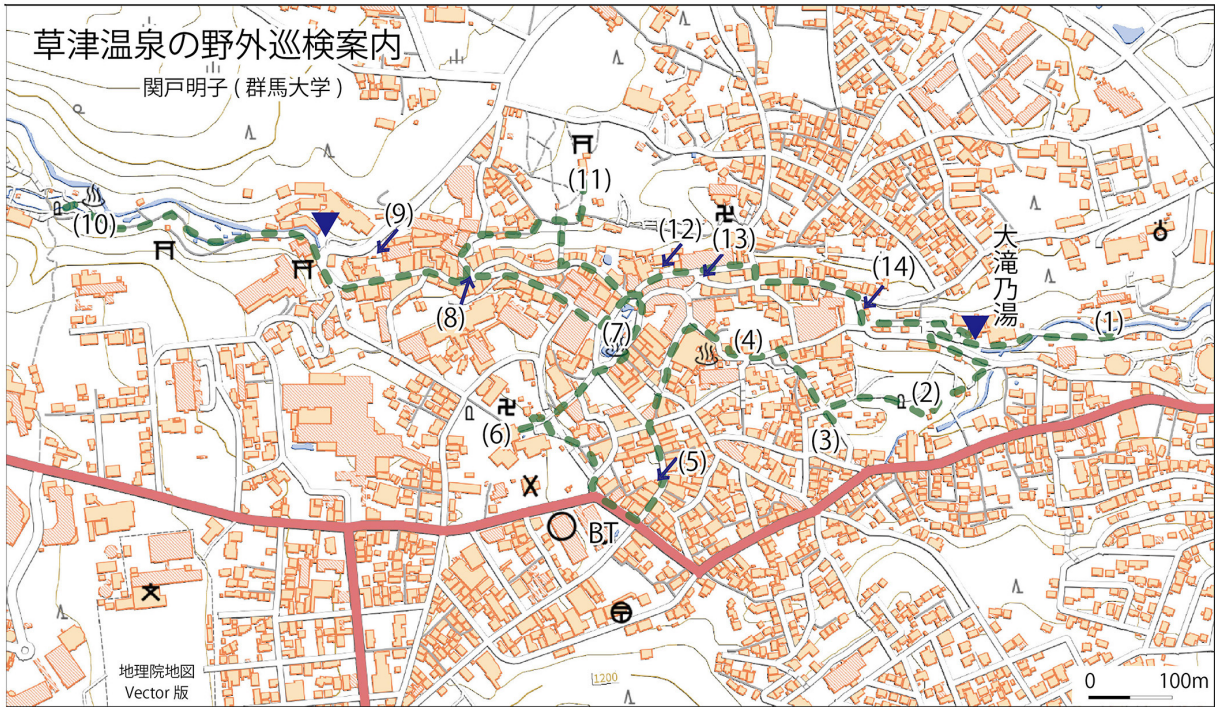
- 1) 本稿に掲載している図表は筆者作成によるもの、鳥瞰図・写真・絵はがきなどは筆者所蔵のものである。
- 2) 共同浴場や旅館の名称は、それぞれの時期の一般的な表記を用いている。例えば、現在の施設名は「熱乃湯」となっているが、それ以前は「熱の湯」が用いられており、あえて統一していない。

## 参考文献

- 宇都浩三・早川由紀夫・荒牧重雄・小坂丈予（1983）「草津白根火山地質図」通商産業省工業技術院地質調査所。
- 関戸明子（2011）「コモンズとしての温泉—草津における温泉の利用・管理の事例を中心に」、谷口真人編『地下水流動—モンsoonアジアの資源と循環』、共立出版、222-243頁。
- 関戸明子（2012）「鳥瞰図にみる近代—草津温泉を事例として」、歴史地理学54（1）、39-53頁。
- 関戸明子（2018a）『草津温泉の社会史』、青弓社。
- 関戸明子（2018b）「江戸後期の草津温泉絵図の記載内容に関する考察」、歴史地理学60（4）、1-19頁。
- 関戸明子（2020）「明治期から昭和初期における草津温泉の時間湯」、群馬大学教育学部紀要（人文・社会科学編）69、55-74頁。
- 早川由紀夫・由井将雄（1989）「草津白根山の噴火史」、第四紀研究28（1）、1-17頁。

（せきど あきこ）

No.1

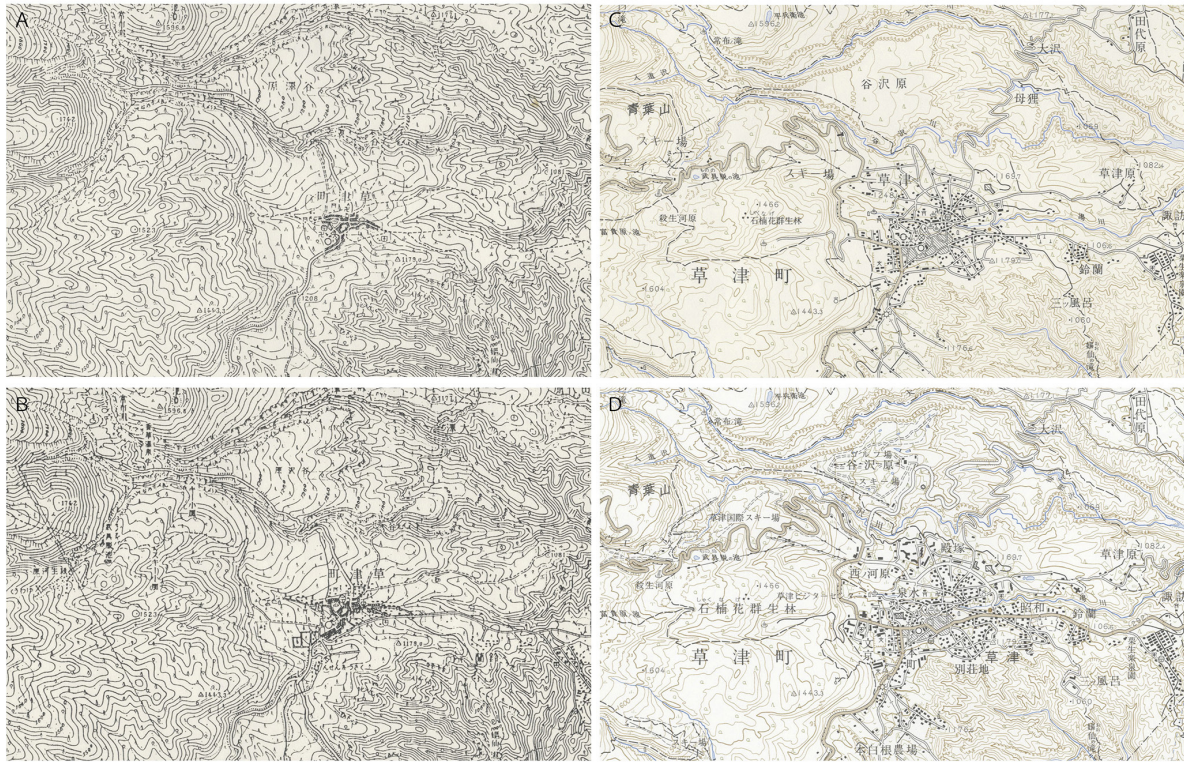


コースマップ (1) 中和工場 (2) 鎮徳公園 (3) 聖パルナバ教会 (4) 地蔵の湯 (5) 瑠璃の湯 (6) 光泉寺 (7) 湯畑 (8) 道標 (9) 凧の湯 (10) 西の河原公園 (11) 白根神社 (12) 千代の湯 (13) 鷺の湯跡 (14) 煮川の湯

▼ 湯川の開渠・暗渠の境界 BTバスターミナル

### 地形図にみる変化

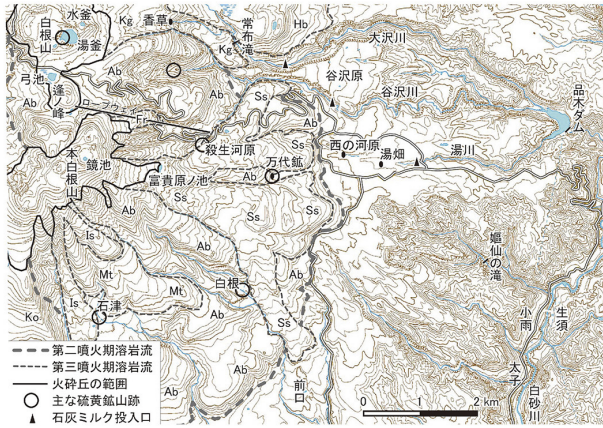
No.2



5万分の1「草津」 A:1912年測図 B:1937年修正 C:1974年編集 D:1997年修正

# 草津の自然と温泉利用

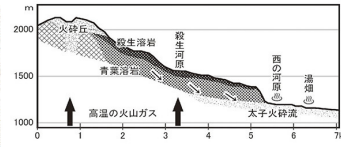
No.3



岩流流 Ko: 米無, Ab: 青葉・前口, Hb: 平兵衛池, Mt: 本白根, Kg: 香草, Fr: 振子沢, Ss: 殺生, Is: 石津

## 草津白根山の地形・地質

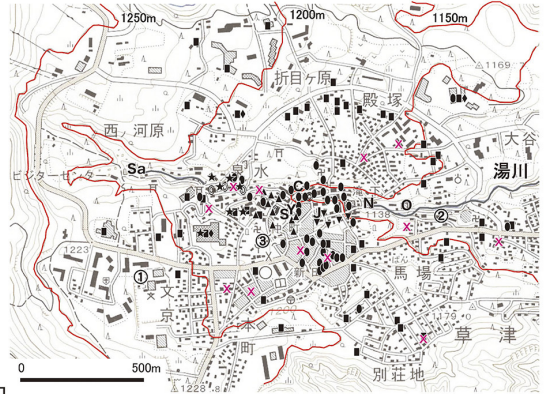
国土地理院 (1991) 「1:15,000 火山土地条件図 草津白根山」, 数値地図 50000 (地図画像) より作成。等高線は 20m 間隔。



草津白根山周辺の断面の模式図



湯川に投入されている石灰ミルク



源泉: Y 湯畑 S 白旗 J 地蔵 N 煮川 Sa 西の河原  
 旅館: ● 湯館 ▲ 白旗 ▼ 地蔵 ★ 西の河原 ■ 万代館 ◆ わたの湯 ◎ 自家源泉  
 ○ 大滝乃湯 C 千代の湯 X 共同浴場  
 ① 温泉温水第一配湯所 ② 第二配湯所 ③ 中継ポンプ所

## 草津における主要な源泉と旅館の分布

旅館のデータは草津温泉旅館協同組合資料 (2004 年) による。複数の源泉を利用している場合は重ねて示した。

## 草津町温泉給湯事業における給湯件数の推移

源泉名	1962年		1976年		1993年		2004年		2014年	
	旅館	その他	旅館	その他	旅館	その他	旅館	その他	旅館	その他
湯畑	18(4)	2	77	12	67	11	67	12	65	9
白旗	13(2)	1	16	1	12	2	10	1	10	1
西の河原	6(13)	6	12	9	7	3	9	1	7	1
地蔵	7(0)	1	7	1	7	1	7	1	6	1
煮川	2(0)	2	4	1	2	1	3	1	1	1
万代館			32	5	86	47	100	46	96	44
熱の湯										
合計	46(19)	11	144	31	179	65	193	63	184	55

1962年の( )の数値は共同引湯の件数。潮見・伊藤(1964), 草津町役場資料より作成。その他は保養所, 研究所, リゾートマンションなど。

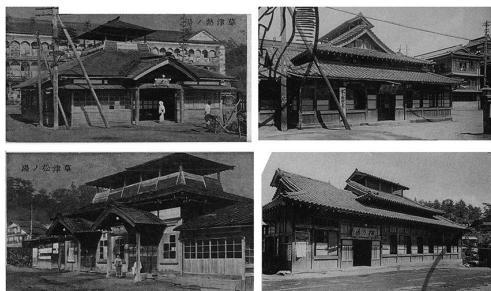
# 草津温泉の主な共同浴場の変遷

No.4

刊行年	No.1	No.4	No. X	No.10	①	No.11	②	No.17	No.18	No.20	No.22	No.31	No.33	No.36	③	No.37	④	No.45	⑤	No.46	
	1810	1825	1829	1853	1859	1873	1879	1880	1885	1887	1888	1889	1897	1903	1909	1910	1914	1923	1932	1936	1938
薬師滝・天狗滝・不動滝	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
大滝の湯/瀧の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
御座の湯-白旗の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
熱の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
箕の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
穂の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
脚気の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
地蔵の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
滝湯/琴平滝/琴平湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
煮川の湯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
松の湯				△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
千代の湯				△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
瑠璃の湯				△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
玉の湯				△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
白舟の湯				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
富の湯				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
嵐の湯				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
関の湯				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
折御座の湯				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

図番号は関戸 (2012) による。前後で変化がない図の情報は省略した。△: 浴場の建物があるが文字注記を欠く。●: 名称の変更。

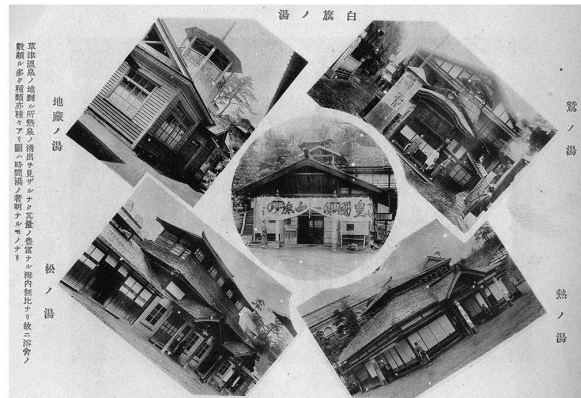
- 「草津村壬申地券字引絵図」。A1は「不動滝」、Hは「泉水瀧湯」、Pは「籠の湯」となっている。
- 折田佐吉『草津温泉の古々路恵』折田佐吉
- 草津専常高等学校・草津町役場『喜喜草津町郷土誌』付図。
- 布施廣雄『草津温泉案内』草津温泉取締所。アミは時間湯を行う浴場。
- 中村健二『天下の草津温泉』大東京社。アミは時間湯を行う浴場。\*: 御座の湯・籠の湯・桜の湯の3湯



熱の湯 (上) と松の湯 (下) の変化 左は iii 期:1918-33, 右は iv 期:1933-45



絵はがき「時間湯熱之湯外部」(ii 期:1907-18)



戸丸国三郎『上州草津温泉写真帖』日本温泉協会代理部, 1914年

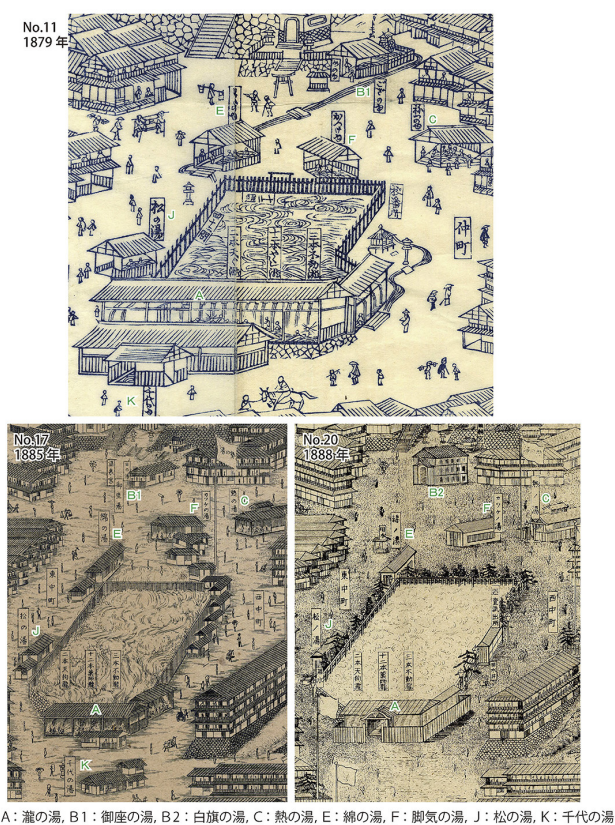
絵図・鳥瞰図の案内情報と描写内容の変化

No	名称	発行年	由来	効能	成分	番付	里程	八景	電線	街灯	宿名	名所	乗物
1	上州草津温泉大図	1810	文化7	○	△	×	×	○	×	×	×	×	馬
2	上州草津温泉図	1812	文化9	○	△	×	×	○	×	×	×	×	馬
3	上州草津温泉図	1821	文政4	×	×	×	×	×	×	×	×	×	馬・駕籠
4	上州草津温泉之図	1825	文政8	○	△	×	×	○	×	×	×	×	馬
5	上州草津温泉略図	1827	文政10	○	×	×	×	○	×	×	×	×	馬
6	上州草津温泉の図	1840?	天保11?	×	△	×	×	○	×	×	×	×	馬・駕籠
7	上州草津温泉の図	1853	嘉永6	○	×	×	×	○	×	×	×	×	馬
8	上州草津温泉の図	1855	安政2	×	×	×	×	○	×	×	×	×	馬
9	上州草津温泉の図	1856	安政3	○	△	×	×	○	×	×	×	×	馬
10	上州草津温泉の図	1859	安政6	×	×	×	×	○	×	×	×	×	馬
11	上州草津温泉之全図	1879	明治12	×	×	×	×	×	×	×	×	×	馬・駕籠
12	上州草津温泉図并八景	1879	明治12	×	×	×	×	○	×	×	×	×	-
13	上州草津温泉之略図	1880	明治13	○	×	×	×	×	×	×	×	×	駕籠・人力車
14	上州草津温泉之全図	1881	明治14	○	×	×	×	×	×	×	×	×	駕籠
15	上州草津温泉図并八景	1884	明治17	×	×	×	×	○	×	×	×	×	-
16	上州草津温泉之全図	1885	明治18	×	×	×	×	×	×	×	×	×	馬・駕籠
17	草津温泉場之図	1885	明治18	×	○	×	×	×	×	×	×	×	駕籠・人力車
18	上州草津温泉之全図	1887	明治20	○	×	×	×	×	×	×	×	×	馬
19	上州草津温泉全図	1887	明治20	○	○	○	○	×	×	×	×	×	人力車
20	草津温泉場之図	1888	明治21	×	○	×	×	×	×	×	×	×	駕籠・人力車
21	上州草津温泉之全図	1888	明治21	○	×	×	×	○	×	×	×	×	馬・駕籠
22	上州草津温泉全図	1889	明治22	×	○	×	×	×	×	×	×	×	人力車
23	上州草津温泉図	1890	明治23	○	×	×	×	×	×	×	×	×	馬・人力車
24	上州草津温泉図	1891	明治24	○	×	×	×	×	×	×	×	×	人力車
25	草津温泉場之図	1891	明治24	×	○	×	×	×	×	×	×	×	駕籠・人力車
26	上州草津温泉図	1892	明治25	○	○	×	×	×	×	×	×	×	馬・人力車
27	上州草津温泉全図	1893	明治26	○	○	×	×	×	×	×	×	×	人力車
28	上州草津温泉図	1893	明治26	○	○	×	×	×	×	×	×	×	馬・人力車
29	上州草津温泉図	1896	明治29	○	×	×	×	×	×	×	×	×	馬・人力車
30	上州草津温泉全図	1896	明治29	○	○	×	×	×	×	×	×	×	人力車
31	上州草津温泉場真景図	1897	明治30	○	×	×	×	×	○	×	×	×	駕籠・人力車
32	上州草津温泉全図	1898	明治31	○	×	×	×	×	×	×	×	×	人力車
33	上州草津温泉場略図	1903	明治36	○	×	×	×	×	○	×	×	×	馬・人力車
34	上州草津温泉場略図	1905	明治38	×	○	×	×	×	○	○	○	○	馬車
35	上州草津温泉略図	1908	明治41	○	×	×	×	×	○	×	×	×	人力車
36	上州草津温泉真景図	1909	明治42	○	×	×	×	×	○	○	○	○	馬・人力車
37	上州草津温泉真景図	1914	大正3	○	○	×	×	×	○	○	○	○	馬・人力車
38	上州草津温泉真景図	1914	大正3	○	○	×	×	×	×	×	×	×	馬車・人力車
39	上州草津温泉真景図	1916	大正5	○	○	×	×	×	○	○	○	○	人力車
40	上州草津温泉真景図	1917	大正6	○	○	×	×	×	○	○	○	○	自動車・人力車
41	上州草津温泉真景図	1920	大正9	×	×	×	×	×	○	○	○	○	自動車・馬車・馬・人力車
42	上州草津温泉真景図	1920	大正9	○	○	×	×	×	○	○	○	○	自動車・馬・人力車
43	上州草津温泉真景図	1922	大正11	○	○	×	×	×	○	○	○	○	自動車・自転車・馬・人力車
44	上州草津温泉案内図	1926	大正15	×	○	×	×	×	○	○	○	○	馬・人力車
45	上州草津温泉真景図	1932	昭和7	×	×	×	×	×	○	○	○	○	馬・人力車
46	上州草津温泉自働図	1938	昭和13	×	○	×	×	×	○	○	○	○	自動車

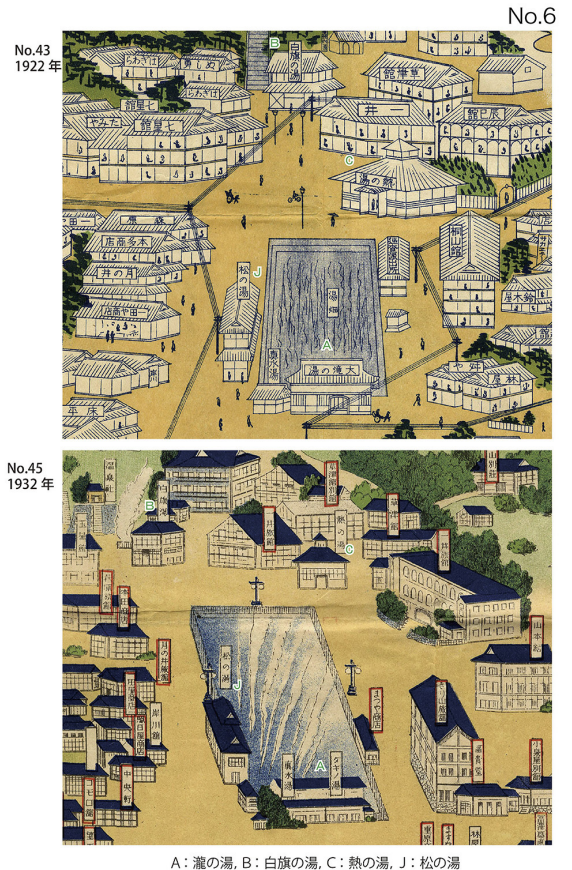
注) 効能を別枠でなく図録中に記載するものに△を付した。名所とは近世以来の「常布の滝、永谷、殺生河原、西の河原、鬼の茶釜、鬼の角力場、木の栗石、ゆるぎ石」のうち、いくつ示されているかを数えた。



鳥瞰図に描かれた湯畑周辺の変化



A: 瀧の湯, B1: 御座の湯, B2: 白旗の湯, C: 熱の湯, E: 綿の湯, F: 脚気の湯, J: 松の湯, K: 千代の湯

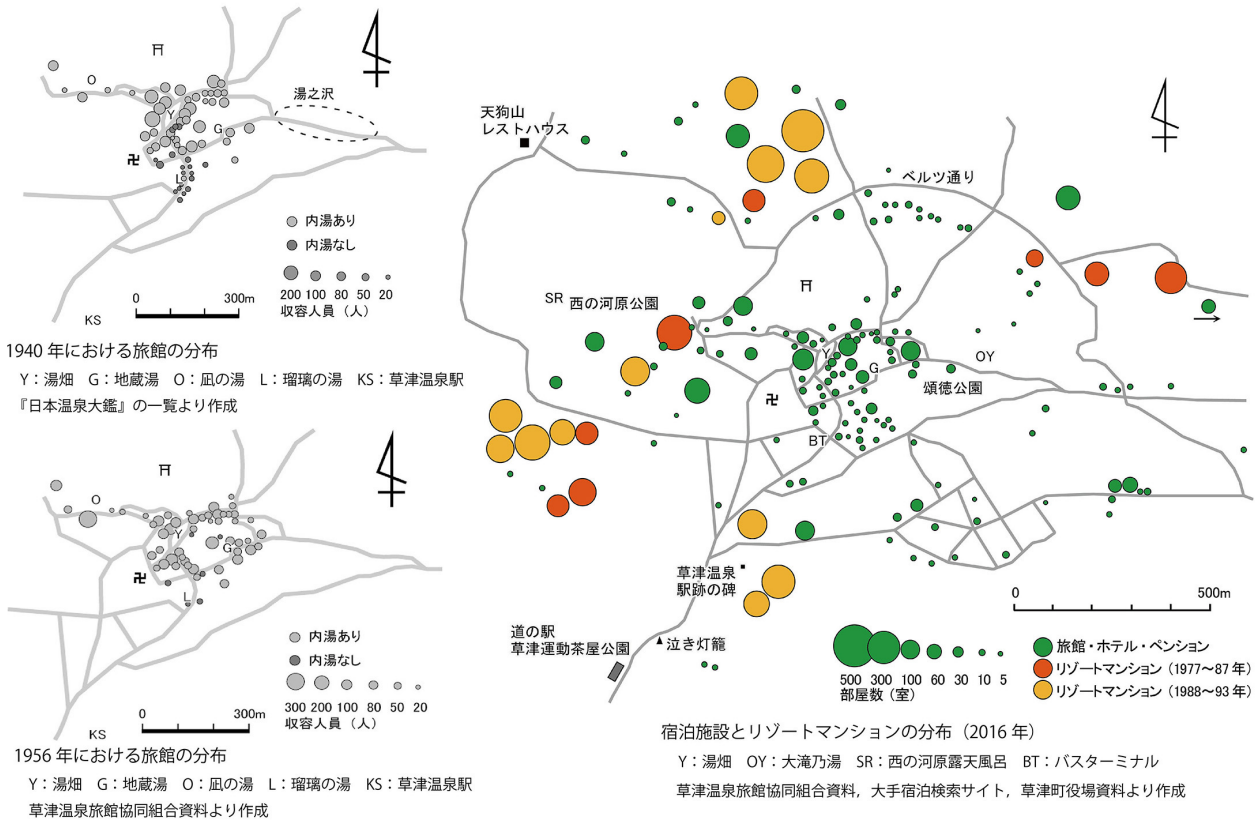


A: 瀧の湯, B: 白旗の湯, C: 熱の湯, J: 松の湯



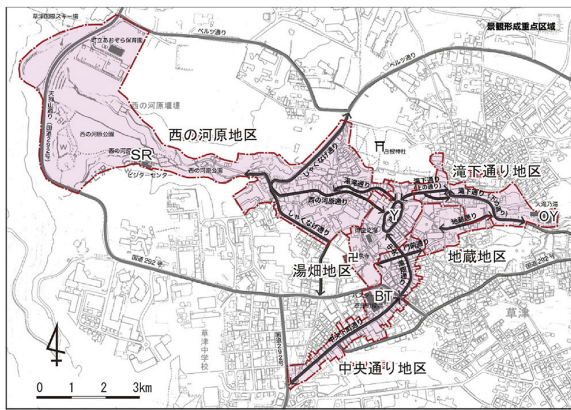
### 草津の宿泊施設の立地展開

No.9



### 草津町における景観整備

No.10



景観形成重点地区

Y: 湯畑 OY: 大滝乃湯 SR: 西の河原露天風呂 BT: バスターミナル



湯畑とその周辺の諸施設

2017年5月の現地調査より作成



⑥昭和初期の石柵



熱乃湯周辺の景観変化

左 2016年6月撮影 右 2004年4月撮影

- ①「徳川八代將軍御汲上之湯」記念塔
- ②湯滝の灯籠 (文政13年)
- ③將軍御汲上之湯枠
- ④湯けむり亭
- ⑤滝見亭
- ⑥昭和初期の石柵
- ⑦足湯滝の湯
- H: 旅館・ホテル,
- 1階の業種: R物品販売, F飲食, Oその他
- 記号の後の数字は建物の階数

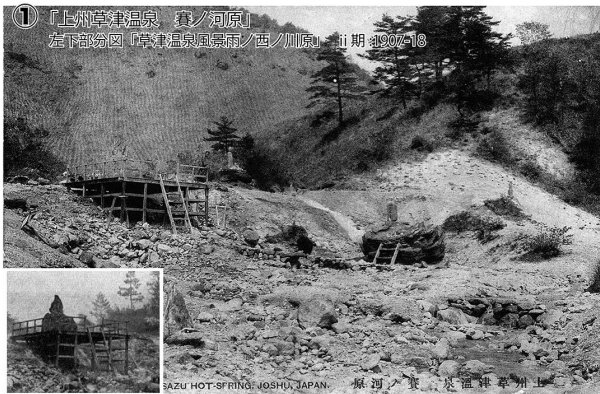






### 絵はがきでみる温泉街全景

(a) 草津小学校: 1904年竣工, (b) 綿の湯, (c) 松の湯, (d) 瀧の湯: 1936年改築, (e) 大東館, (f) 桐山, (g) 七星館  
(h) 草津町役場: 1908年竣工, (k) 白旗の湯, (m) 一井辰巳館, (n) 富久住, (o) 秋原, (p) 名古屋館, (q) 奈良屋



### 絵はがきでみる西の河原

ベルツ博士記念碑 1935年建立

